

変わる日本の「暮らし」と「まち」

横浜市庁舎の移転で注目 歴史と未来が融合する横浜の新拠点

神奈川県横浜市 北仲通南地区
第二種市街地再開発事業
(1990年・平成2年)

阿部民子

text by Tamiko Abo

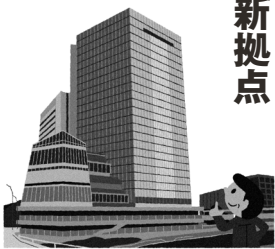


illustration: Shigeyuki Sakata

文明開化の頃、外国人を乗せた馬車が行き交い、ガス灯やアイスクリームなどの発祥の地となった横浜「馬車道」。そこに隣接する北仲通地区は、日本の主要輸出品であった生糸の検査所や倉庫などが建ち並んでいた歴史ある地区だ。現在では横浜の新たな顔であるみなとみらい21地区と、横浜の歴史・文化を誇る関内地区の結節点としての存在意義も大きい。

その北仲通地区で、今年6月に横浜市庁舎が移転し、全面使用が開始された。新市庁舎は地上32

階、地下2階。横浜土産が買える商業施設やイベントなどが開催できるアトリウム、大岡川上流の桜並木と連続した水際線プロムナード、みなとみらい地区が一望できるラウンジなども整備。市政業務の利便性や効率性向上だけでなく、広く市民に親しまれ、周辺地区相互の回遊性を高めるハブとしての役割も期待されている。

段階的に進むまちづくり

9月24日、その新市庁舎アトリウムで、「横浜・北仲のパブリック

れからの展望を共有させていただきたい。そしてこのフォーラムをきっかけとして、地区内外の住民の交流やにぎわいづくり、就業環境の向上や馬車道駅の活用など、公民連携による地区の活性化を図っていったらと考えています」

北仲通地区は、栄本町線を境として、北地区と南地区に分かれ整備が進められてきた。先行して開発された南地区は2003年に横浜アイランドタワーが竣工。横浜市新市庁舎もこの地区に建つ。

北地区は、1996年の横浜第二合同庁舎竣工を皮切りに、UR賃貸住宅「シャレール海岸通」の管理開始、ブライダル施設「ノートルダム横浜みなとみらい」、「アパホテル&リゾート〈横浜ベイタワー〉」、本年度は住宅・文化・商業・宿泊施設等からなる「ザ・タワー横浜北仲」と商業施設「北仲ブリック&ホワイト」が次々と開業。今後も超高層ビルの建設が予定されている。

南北が融合して「のまち」

北と南、それぞれに個性あるまちとして開発が進められている北

仲通地区。横浜北仲エリアマネジメント事務局長の高島和臣氏は、北地区の特徴を次のように語る。「北地区は、住宅・商業・業務等から構成された複合用途のまちです。また、段階的に整備が行われているため、常に変化し、経年良好化しているのも大きな特徴です。我々はエリアマネジメント組織として、まちの魅力向上のためのマールシエなどを行ってきましたが、

今後はどなたにも有益で納得感のある活動を展開し、にぎわいのある地区にしていきたいですね」一方、南地区でのエリアマネジメントを担うのがURだ。北地区では賃貸住宅の管理者として、また南地区では再開発事業の事業施行者であり、かつ本社が地区内の横浜アイランドタワー内にあることから、北仲通全体のまちづくりにも尽力している。その最前線で活躍しているのが、本社職員有志でつくられた組織OKA (Open Kitanaka-Minami Project)だ。メンバーの小林宏平に話を聞いた。「OKPの活動目的は『このまちをつくり、本社も置くURとして、訪れる人・使う人に楽しんで



横浜市新市庁舎内で行われたオンラインフォーラムでの一コマ

くスペースを考える」をテーマとした共創オープンフォーラムが開かれた。北仲通地区の開発事業関係者が一堂に会し、これまでの取り組みと活性化の方策について意見を交換。その模様は新型コロナウイルス感染拡大防止を配慮し、オンラインで公開された。全体の取りまとめ

いただき、愛される北仲通南地区にすること」です。まちづくりの施行者として、単にまちをつくらせて終わりではなく、このまちがどういう使われ方をしていくかを見届け、OKPを通じてまちづくりに必要なことを実践していく。それを全国のまちづくりにも活かしていきたい」

具体的な活動として、2017年から、横浜市水道局主催の「打ち水大作戦」に協賛して、環境保全の普及啓発とまちのにぎわいを創出。2019年には、本社近くの象の鼻パークにおいて、「公園でオフィスワークを行う」社会実験を実施。さらに今年からは、横浜アイランドタワー敷地内にキッチンカーを誘致。市庁舎移転で激増したオフィスワーカーにランチや昼休みの楽しさを提供し、北仲通に新たな人の流れを創出している。「今後は、私有地と公共用地の境をなくし、まちに人がいることを日常の風景にしたい。ご近所どうし協力して行うことで、北仲通地区全体に人の流れを生み、地区全体を楽しんでできれば」と小林。北地区と南地区の間には横浜市

庁舎移転で新たな横断歩道ができ、歩行者デッキの整備も進行中。市庁舎移転により、両地区の緊密度はいつそう強まりを見えている。

両地区の間に位置する、みなとみらい線馬車道駅を管理する横浜高速鉄道経営管理部経営企画課の三川啓吾営業推進係長は「市庁舎移転で、明らかに人の流れが変わりました。今後は駅構内を有効に使う、まちを一緒に盛り上げていきたい」と語る。また、横浜北仲エリアマネジメント理事長補佐を務める日新の事業戦略部西橋雅之不動産室長は「これからの北仲通地区がよりよいまちになるよう、地区の事業者で勉強しながら進めていかなければ」と話す。

行政とまちづくり、鉄道、物流などさまざまなプロと住民が手をとりあってつくる新しいまちは、多くの人を惹きつける横浜のもう一つの新たな拠点になりそうだ。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社